

き・たん【奇譚】めずらしい話。不思議な話。

奇譚

きたん

ルーム

はやみねかおる



も く じ



オ ー プ ニ ン グ
O P E N I N G _____ 7

第 1 の 奇 譚 _____ 39

第 2 の 奇 譚 _____ 65

第 3 の 奇 譚 _____ 81

第 4 の 奇 譚 _____ 107

第 5 の 奇 譚 _____ 135

第 6 の 奇 譚 _____ 161

第 7 の 奇 譚 _____ 179

第 8 の 奇 譚 _____ 201

第 9 の 奇 譚 _____ 223



エ ン デ イ ン グ
E N D I N G _____ 235



あ と が き _____ 242



オ ー プ ニ ン グ
O P E N I N G



いきなりの質問で悪いけど、教えてほしい。

きみは、どのSNSを利用してる？

やっぱり、ラインやツイッターかな。フェイスブックやインスタグラムを使ってる人もいるんじゃないかな。

そういうおまえは、何を使ってるのかって？

ぼくは、ルームだよ。

えっ、ルームを知らない!? ……今、話題になってる最新のSNSだから、知ってると思ったんだけど。

じゃあ、ルームの説明を少しさせてもらおうかな。

ルームは、ツイッターやフェイスブックのような、交流系のSNS。ホストが、あるテーマを持った部屋を設置し、そこへゲストを招待する形になっている。

いろんなルームがある。

仲間とひまつぶしの会話をするとか、映画の感想を話しあうとか——。

指揮者が楽器の演奏家を集めてコンサートを開いたり、ちりぢりになってしまったクラスメートを集めて同窓会をしたりという例もある。

一時的なものではなく、定期的に開かれるルームもある。そこでは、学校のように、いろんな講座が開かれたりしている。

ぼくが招待されたのは、『奇譚マニア』のルーム。

えっ、『奇譚』の意味がわからないって？ 奇譚というのは、めずらしい話や不思議な話のこと。ぼくは、自分で小説（のようなもの）を書いているので、そんな話に興味があるんだ。

ルームの招待状が来たのは、今日のお昼。いつの間にか、部

屋のコルクボードにピンでとめてあった。

招待状には、本日午後5時からルームを開くこと、入室のためのパスワードなどが書いてある。

入室用PW：kitanmania4649

土日祝日と木曜日の午後以外、入室可

ぼくは、招待状を見ながら考える。

いつ、だれが、招待状をコルクボードにとめたのか？ それに、ぼくが奇譚に興味があるって、どうして知ってるんだろう……？

あやしいという以外、表現のしようがない招待状。

なのに、ぼくがルームに入ってみようと思ったのは、小説を書くことに行きづまっていたから——。奇譚を聞くことで、小説のヒントがつかめるんじゃないかと思ったからだ。

ルームには、パソコンやスマホ、タブレットから入れる。

今、部屋には、デスクトップパソコンが2基、タブレットが2台、ノートパソコンが3基、スマホが2台ある。

そのなかで、愛用のノートパソコンを立ちあげる。書きかけの小説が入ってるフォルダーを見ないようにして、ダウンロードしたルームのアプリケーションをクリック。

最初に出てくるのは、ドアの画像。

ドアの表面に、個人情報登録する画面が浮かぶ。名前や年齢、ルーム内で使う名前を入力するんだけど、あとでもかまわないので、なにも記入せず「登録完了」のボタンをおす。

すると、ドアノブの上にパネルが現れた。ここに、入室のためのパスワード「kitanmania4649」を打ちこむ。

ルームへのドアが開いた。

真っ白な壁の殺風景な部屋。

この段階で専用のゴーグルをつけると、ヴァーチャルリアリティのように、ルームのなかを自由に見わたせる。

部屋の中央に、大きなまろいテーブルがある。そのまわりに、10脚の白いイスが並んでいる。

ルーム内に入ると、ぼくらの姿はアバターとして表示される。奇譚マニアのルームでは、アバターとして、動物のぬいぐるみが使われる。最初に希望を聞かれなかったから、どんな動物になるかは、ホストが勝手に決めるようだ。

ちなみに、ホストは、自分で開くルームのアバターを管理する権限をあたえられている。たとえば、ホラー映画を語りあうルームのホストは、アバターにゾンビを使ったりしている。一度、洗濯物愛好者のルームに招待されたんだけど、そのときはTシャツのアバターだった。

さて、奇譚マニアのルームでは、ぼくはどんな動物のぬいぐるみになっているのだろうか？

自分の手を見る。蹄がついている。体には、田んぼのヒビ割れのような網目模様がある。見慣れた動物のような気がするけど、なんだったかな……？

ルームのなかを見回しても鏡がないので、どんな動物になるかは確認できない。

ぼくは、並んでるイスのひとつを見た。シロクマのぬいぐるみが座っている。

探偵

やあ。



シロクマの上に、ふきだしが浮かんだ。
ルームでの会話は、キーボードやマイクを使う。入力した文字や音声は、ふきだしで現れるようになっている。

ほとんどの人が、キーボードで入力せず、音声入力する。そのほうが、速いし楽だからだ。

ぼくも、音声入力で発言する。

こんにちは。探偵さん——と呼べば、いいんですね？



探偵

ああ。よろしく、頼むよ。

探偵が、現実社会で本当に探偵をしてるかどうかは、わからない。ルームに入るとき、ここで使う好きな名前を登録することができるからだ。

そういえば、ぼくは名前を登録しなかった。自分の上を見ると、名札が現れていない。

でも、探偵は気にしないのか、ぼくの名前を聞いてこない。しばらく無言の時間が流れた。



アイドル

すると、ノックの音が生、
ドアが開いた。オオカミのぬい
ぐるみが立っている。

あの……ここ、奇譚マニア
のルームですね？

オオカミとは思えない気弱そ
うな感じの発言。上には、『ア
イドル』の名札。



探偵

ああ、そうだよ。どうぞ、どうぞ——。

アイドルは、ひとつうなずくと、ルームに入ってきた。そし
て、探偵のとなりに座る。

次に入ってきたぬいぐるみは、
タヌキ。『人形遣い』の名札が現
れる。

ノックもなしにドアを開け、

やあやあ、こんにちは。おじ
やまするよ。

雰囲気としては、ふきだしのな
かの文字を大きくしたい。

人形遣いは、ぼくの左どなりに

人形遣い



座ると、休むことなく話しはじめる。



人形遣い

いすばかり多く並んでるけど、まだ半分も来てな
いのか……。ずいぶんさびしいルームだな。こん
な調子で、はじめられるのかい？ たいくつだっ
たら、おれが人形劇を見せてあげてもいいが、こ
の姿でできるのかな？ いや、それ以前に、人形
がないじゃないか。

ふきだしのなかに、



人形遣い

ハッハッハ！

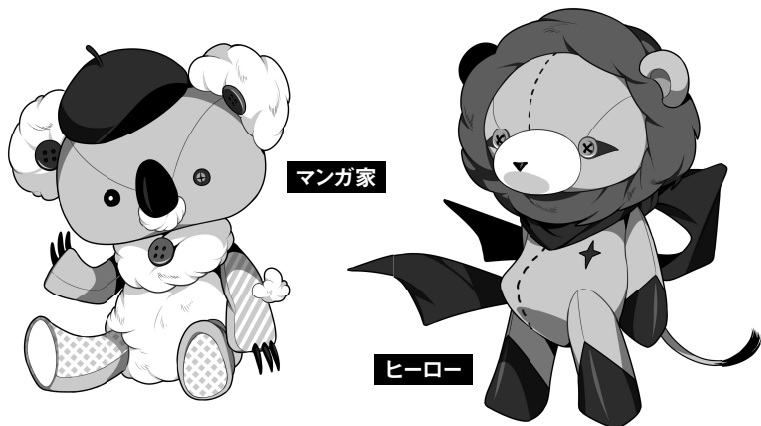
と、笑い声が出た。ルームの音声入力おうしやうは優秀で、笑い声やク
シャミの音も、きちんと再現する。

ふきだしで、ルームの空間がいっぱいになってくる。次にだ
れかが話さないと、笑い声の
ふきだしがいつまでも残ること
になる。

次に入ってきたのは、ゾウ。
名札は、『先生』。残念なこと
になにも言わず、軽く頭を下
げると席に着いた。

先生





その後も、『マンガ家』の名札のコアラ、『ヒーロー』の名札のライオン、『新聞記者』の名札のチーター、『少年』の名札のヒツジのぬいぐるみが入ってきた。

この4人も、無言。

そして最後に『遊民』の名札のクロヒョウのぬいぐるみが座り、すべてのいすがうまった。



『遊民』って、
なんですか？



ぼくの右どなりに座った少年が、チャットモードで質問してきた。

チャットモードを使えば、指定した人とだけ、ほかの人には見られることなく会話をすることができる。



仕事をしないで遊んで暮らしてる人のことだよ。

相手が『少年』の名札をつけていたので、年も近いんじゃないかなと思い、ぼくは気軽な口調で答えた。



そうですか、ありがとうございます。

少年の口調は、^{れいぎ}礼儀正しい。ぼくが名札をつけてないので、どんなことばづかいをすればいいのかわからないのだろう。そうだとしたら、なんとなくぼくと似ている。

少年が続けた。



やっぱり、あなたは、ぼくより物知りですね。
認めます。

えっ？

……なんだ、この言いかた？ まるで、ぼくのことを知って
 するような口ぶりだ。

質問しようとしたとき、新しいふきだしがルームに現れた。



人形遣い

まだ、はじまらないのか！

人形遣いだ。不満な感じが、よく出てる。



先生

落ち着きなさい。もう、はじまりますよ。

この冷静な感じのふきだしは、先生。



先生

10脚のいすが全部うまってます。つまり、ルー
 ムに入室しなければいけない人間は、ホストも含
 めて全員集まったということです。これから、ホ
 ストが、口火を切って話しはじめるでしょう。

説得力のあることばだ。

ぼくらは、ホストのことばを待つ。しかし、だれも話そうと
 はしない。



探偵

これは、おかしいな。

探偵が腕を組む。



探偵

ホストがいなければ、ルームを開くことはできな
 い。なのに……。

それに対して、クロヒョウのぬいぐるみ——遊民が手を挙げ
 た。



遊民

おれは、ルームというSNSについてくわしくな
 いんだが——。たとえば、ホストが存在せずに、
 ルームが開設されることはないのか？



探偵

ないね。

断言する探偵。



探偵

ホストは、ルームの運営側に、どんなルームを開
 設するかやゲストを何人まで招待するかを申請し、
 ルームの鍵をもらう。ホストは、ルームの内装を
 整え、ゲスト分のいすを用意し、パスワードの書
 かれた招待状を出す。つまり、これらの仕事をす
 るホストがいらない限り、ルームは存在しないんだ。

スラスラ流れる探偵の説明。

今度は、オオカミのぬいぐるみ——アイドルが手を挙げた。



アイドル

ゲストは、必ずルームに来るんですか？ 招待状だけ受け取って、入室しないって場合もあると思うんですけど……。

すると、探偵——シロクマのぬいぐるみが、腕をふった。本当なら、チッチッチと指をふりたいのだろうが、ぬいぐるみなので表現にくいのだ。

ちなみに、「歩く」や「座る」、「手を挙げる」などのかんたんな動作は、ふきだしの内容などからコンピューターが判断してやってくれる。「腕を組む」や「肩をすくめる」とか、今の探偵のように「指をふる」というような少し複雑な動作は、コマンド入力が必要になる。

つまり、探偵はコマンド入力してまで、指をふりたかったわけだ。なかなか、こだわりのある性格の人のようだ。

その探偵が、発言する。



探偵

それはないだろう。第一にホストは、招待されても来ないような人間に、招待状を出さない。

この説明に、みんなはなにも言わない。

でも、ぼくには聞きたいことがある。

——ホストは、どうやってゲストを選んだんですか？ どうして、ぼくが奇譚に興味があるって知ってるんですか？

ぼくは、九つのぬいぐるみを見回す。

このなかのだれが、ぼくの好みを知ってるのか……。ぼくは、それを知りたい。



人形遣い

なんにしても、ここに来てるやつらは、奇譚が好きなんだ。モメずに、仲良くやろうぜ。

人形遣いが発言した。



先生

でも、考えてみると、奇譚の登場人物はかわいそうですね。永遠に死ぬことなく、奇妙な物語のなかで生きつづけなければならないのだから。

先生——ゾウのぬいぐるみが、組んだ手の上にあごをのせて発言した。テーブルに、長い鼻がはみ出す。



遊民

おや、もう奇譚を披露するのかい？

遊民のふきだしには、茶化すような雰囲気がある。



先生

そんな気持ちはありません。ただ、わたしは奇譚を聞いたたびに、死ぬことのない登場人物に同情してしまうんです。



少年

本当に、登場人物は、永遠に死なないのでしょうか？

少年が、ふきだしをはさむ。



少年

ぼくは、思うんです。登場人物も、死ぬことはあるんじゃないかって。



マンガ家

どういうことだい？



少年

登場人物には、物語を成立させるという存在意義があるんです。もし、自分の存在に意味がないと思ったとき、登場人物は死ぬでしょうね。



マンガ家

なるほど、ストーリーづくりの勉強になるな。

マンガ家が言ったあと、新聞記者がつぶやく。



新聞記者

ホストがだれかわからないが、このまま進行していてもいい雰囲気だな。

そのとき、天井にふきだしが現れた。

ようこそ、諸君！ 今日、ルームの開設にふさわしい日なのだよ。

ぬいぐるみが、いっせいに、たがいを見回す。





マンガ家

だれだ、今の……。



探偵

だれでもない。でも、このなかのだれかが、ホストモードで発言したのだろう。

探偵が説明する。

ホストには、ホストモードとゲストモードの、2種類の発言のしかたがある。つまり、一人二役の話しかたができるというわけだ。

探偵の説明が続く。



探偵

あと、わたしたちが発言するとき、ふきだしには、登録した者の名前が自動でつく。だから、だれが発言したかわかる。でも、今の発言は、登録した者の名前がつかなかった。



新聞記者

ということは、名前を登録してない者の発言か？

新聞記者のことばに、ぬいぐるみたちが、いっせいにぼくのほうを見た。

今のは、ぼくじゃありません。ぼくも招待状をもらったゲス——

ぼくの発言の途中で、また発言主不明のふきだしが現れる。

わたしが、このルームのホストなのだよ。
名は、『マールダー』。

マールダー……。殺人者って意味だ。

これから、きみたちをひとりずつ殺していくのだよ。

マールダーのふきだしで、ぼくの発言が消されていく。

だれから殺すかは決めてないのだよ。もし、早く殺してほしい者がいたら、手を挙げてほしい。優先的に殺してあげよう。

ぬいぐるみは、だれも発言しない。もし、それが生きた人間だったら、顔色が変わっていたことだろう。



人形遣い

ハハハハハ！

笑い声のふきだしが現れた。



人形遣い

おれたちを殺す？ なにをバカなことを。現実世界じゃないんだ。ここは、SNSの世界。どうやって殺すというんだ？